会報 鳩
ユース版

スーパーサイエンス校
第４期の指定なる
文科省「屋代高・附属中には世界で活躍するサイエンスリーダーの育成を」

文部科学省はこの度、平成28年度からのスーパーサイエンス校として、全国から応募のあった98校のうちから34校を選び、公表した。その結果、屋代高校は平成15年度指定以来、４期18年間にわたり指定を受けることが決まった。「スーパーサイエンス校」事業は、文部科学省が、科学技術、理数教育を重点的に行う研究指定校として、平成14年度に立ち上げたものである。

過去３期の屋代高校への評価については、平成26年度の文科省ＳＳＨ評価会議は、「一人一研究の取組などを通して教員の共通意識や生徒の主体性を育むものとなっており、成果が出ている」として、Ａランクの評価をしていた。また、同評価会議は今後の課題として「附属中学の併設で理数科の中高一貫教育も可能になるので、連携した教育課程の構築や、科学オリンピック等への生徒の参加を期待している。」としたが、今回、文科省は屋代高校には「世界で活躍するサイエンスリーダーを育成するための教育活動の研究開発」との声明を出した。

なお、スーパーサイエンス校事業の発足当初（平成14～16年）から継続して指定を受けているのは、全指定校200余校のうち次の11校である。

千葉（千葉）、東工大附属（東京）、高崎（群馬）、屋代（長野）、金沢泉丘（石川）、松坂（三重）、天王寺（大阪）、奈良（奈良）、神戸（兵庫）、広島大附属（広島）、益田（島根）

ＳＳＨ運営委員長 清水筧先生が談話

ＳＳＨ校として培われてきた過去13年間の生徒たちの努力と成果が今回の採択に結びついたと思っています。

ＳＳＨは文部科学省と県教育委員会（屋代高校）が科学技術系人材育成のために、独自のカリキュラムによる授業や、大学・研究機関などとの連携、地域の特色を生かした課題研究などの取り組みを積極的に行う事業であります。本校としては、信州の豊かな自然に学び、持続可能な社会の構築に貢献できる、グローバルサイエンスリーダーを育成するため、以下の４つを目標に掲げています。①「中高一貫６年間の理数教育課程の構築」②「普通科を含めた協働的研究活動の更なる充実」③「グローバルコンピテンスの涵養」④「連携による独創性の育成」。主な対象も３期までの理数科生に対し、４期申請では理数科生に加え選抜生、一貫生、附属中学生までひろげ、学びのスパイラル（発見→探究→発信→発見）により課題探究力を身につけること目的としています。そのため新たに「一人一研究α」（一貫生）「課題探究」（普通科）という独自科目を設定し、既存の「一人一研究」（選抜生）「課題研究」（理数科）「科学リテラシー」（附属中生）の更なる充実とともに学びの波及効果、相乗効果も期待しています。

これからは、申請した内容を具現化し、科学への興味を引き出せる学びの場を増やすことができるか、スパイラルを繰り返す科学的探究活動の中で研究開発する手法を学ぶことができるかが課題となります。今後とも皆さま方のご理解とご協力をいただき、ＳＳＨ校としての新たな一歩を踏み出したいと思っています。

人

県弁護士会会長に就任された 柳澤修嗣氏

更北中出身で、高校第28回のご卒業。高校時代はバレーボール班で活躍され、中央大学法学部を経て、平成２年に司法試験合格。同６年長野市内に柳澤法律事務所を開設。平成16年第１回「屋高フォーラム」の講師を務めた。平成28年４月、県弁護士会会長・日弁連理事に就任。同窓会副会長。

○最近、憲法問題や「子どもを性被害から守るための条例」の制定にかかわり、マスコミによく登場されますが、会長職はご多忙のようですね。

―弁護士としての活動は時間的に大幅に制約を受けますね。しかし弁護士法では「社会秩序の維持及び法律制度の改善」を弁護士の使命と定めていますから、こうした活動は、いわば我々の使命と考えています。

○弁護士になられた直接の動機は「悔しさ」にあると伺いましたが。

―はい、司法試験を受けようとした時、先輩から「お前は受からないと思うから、試験は止めて就職したらどうか。」と言われました。今考えると、その当時の自分は、先輩の言われるレベルであったと思います。でも「今に見ていろ！」というメラメラと心に燃え上がるものがありました。それまで遊び半分であった弁護士になろうという気持ちが、それ以降本気になったのです。

○「屋高フォーラム」の中での「能力は努力によって獲得される」というお言葉を思い出しました。

―努力が継続できるには、素晴らしい先生に出会ったり、出来事に感動するとか、そういう中でそれが強い決意や意欲となります。

倦まず飽きまずコツコツと努力を重ねていき、ふと周りを見回すと、とてもかなわないと思っていた人を超えていたりするものです。能力は獲得されるものですね。

平成二十八年度スタート
附属中学校 担任先生の紹介

①これまでの勤務校②大学での専門分野③ご趣味等④着任所感⑤附属中学生への期待

１年Ａ組担任 垣内 孝康 先生

①上田市立丸子中学校→安曇野市立豊科南中学校
②統計学
③卓球・ドライブ
④様々なポテンシャルと意欲を持った生徒が多いです。また、自分自身が学ぶことが多いです。
⑤「気は長く、心は丸く、腹は立てず、己は小さく、命は長く、人は大きく」世界へはばたいてください。

１年Ｂ組担任 池田 実千代 先生

①小諸東中学校→高陵中学校→信濃小中学校
②英文科
③ミュージカルを観ること、ホットヨガ
④高校生の挨拶が清々しくてとてもいいと思います。
⑤特にこの学校では学ぶことややらなければならないことが沢山あり大変と感じることもあるでしょうが、その中で手抜きをせず努力し続ければ相当な力がつくと思いますので、楽な道を選ばず頑張っていって欲しいです。

３年Ａ組担任 丸山 拓磨 先生

①真田中学校→高瀬中学校
②国際関係
③読書、洗車
④中高一貫校ということで、中学生と高校生の交流の場が沢山あって素晴らしい。
⑤中学生の３年間で勉強や体、人間関係など様々な面で土台を作り、高校生でそれを更に広く深くしてほしい。

３年Ｂ組担任 宮崎 美裕 先生

①辰野中学校→信更中学校→高遠高校→長野南高校→長野吉田高校
②油絵
③旅行（金沢方面）
④生徒たちは、様々な活動に前向きに取り組む。また、安心して仕事を任せられる。
⑤一芸に秀でた人間になってほしい。

同窓会館建設寄付余話
封筒に入れられた46万円のご寄付
高校第12回生Ｔ氏の母校への思い

去る４月１日（平成28年）、高校12回のＴ氏が同窓会事務局を訪ねて、封筒に入れられた36万円を差し出され、同窓会の事業に使ってほしいと言われた。

おもむろに高校３年生であった昭和34年９月のことを語られた。大型台風が長野県北信地方を襲い、千曲川が氾濫し、田畑が流されてしまった。当時の多くの家庭がそうであったように、養蚕で生計と立てておられたので、Ｔ氏のお宅でも桑畑が流されてしまったことから、ご両親は飼育途中の蚕を泣く泣く廃棄せざるを得なかった。その結果、月額600円の授業料の支払に影響が出て、家族で相談を始めていた矢先、担任の山崎寛夫先生（地理、母校ご在職：昭和33年～同42年）がこれを察知され、授業料免除の措置をとって下さった。

６か月後、無事に高校を卒業できたことに、「いつか恩返しをしたい」と考えておられたのだそうで、免除いただいた月額600円の授業料が６か月に及んだので「36」という数字で恩返しをしたい、と言われた。

これとは別に、同総会館建設寄金指定で10万円を添えられた。身につまされる先輩のご芳志に、事務局員一同感銘を覚えている。

連載・私の附属中学時代（その五）
元シリア大使・第12回屋高フォーラム講師 国枝昌樹氏（私立栄光学園）

〈くにえだまさき氏〉昭和21年横浜市生れ。栄光学園を経て一橋大学卒業後、外務省に入省。1990年のイラク大使館人質事件では、大使館参事官としてフセイン政権との間で解放交渉にあたり、日本人人質240余名の救出に成功して全世界の喝采を浴びた。1991年ジュネーブ軍縮会議日本政府代表公使。主な著書に『報道されない中東の真実』（朝日新聞出版）、『イスラム国の正体』（朝日新書）、『「イスラム国」最終戦争』（同）などがある。

わたくしの中学は中学高校一貫校として知られる私立栄光学園である。キリスト教カトリックのイエズス会が経営する男子校だ。

自宅近くの公立中学は当時評判が甚だ悪く、そこに進学する気持ちはさらさらない。でも、それではどこへという知恵があるわけでなく、結局母が考えてくれた。わたくしの家は母子家庭だった。

入学してみると外人教師がずいぶんいて驚いた。みな、神父である。英語を教えてくれるのだが、ドイツ人であり、ハンガリー人であり、チェコスロバキア人であり、ブラジル人であり、みな英語は母国語ではない。大丈夫かなという疑問を抱き、アイルランド人が担当になってくれた時にやっと安心したのだが、先生の発音がどことなく特殊で、裏で友人たちと先生の真似をしては笑いあっていた。

とはいえ、この学校の英語の教科書は独自に編纂したもので、当時としては画期的なものだった。学校が次に重視したのは体育だったようだ。真冬でも二時間目と三時間目の授業の間の休憩時間に全校生徒が校庭に出て一斉に上半身裸でラジオ体操をする。往年のドイツの雰囲気がなくもなくて、問題なしとしないが、そんなことは知らず純粋に体を鍛えた。学校に占領政策が微妙に関係していたことを知るのは大学生になってからのことだ。

一貫校なので教育方針は六年間首尾一貫し無駄がない。だから大学進学にはまことに有利である。ドイツ人の校長、副校長は青年の人格形成をよく口にして鍛えてくれていたが、自らを省みて成果があったのかどうか、全く自信がない。

わたくしがこの六年間を顧みて思うのは、七〇歳に達した今でも親しく付き合い続ける友人たちの存在だ。十代に六年間親しく交わり、その後まったく別の世界で生きたあとで再び集い合うのは、澄んだ小川の水が世の中の芥（あくた）を払い去って静かに流れ続けるような交わりである。大学の友人や社会に出た後で親交を結んだ友人知人たちとはまったく異質な世界がそこにある。一貫校にして初めて得られた貴重な財産なのだろうと思っている。

新任校長 森山弘之先生にお聞きする

①まずは、ご着任の所感からお伺いいたします。

生徒たちの挨拶が気持ちよく、何事も一生懸命に取り組むという姿勢が素晴らしい。学校周辺も田園風景やあんずの里があり、自然が豊かで素敵なところ。季節の移ろいもよく感じられ、教育活動には最適な立地という印象を受けました。

②県教育委員会高校教育課からご着任と承りました。どんなお仕事をされておられましたか。

緊急事態も含めた、高校を取り巻く様々な課題への対応。教育政策に関する、教育委員会内での連絡調整、各校長先生方への指示・伝達などです。

③ご専門はどんな分野ですか。

数学で大学の卒業研究は位相幾何学でしたが、現在興味がある分野は「整数論」です。この分野は、問題の意味は中学生にも理解できるが、未解決という問題が多く興味深いです。

④ご趣味についてはいかがでしょうか。

興味を持った分野の本を、読む読まないに関わらず一気に多数集める習性があります。趣味なのかもしれません。

⑤附属中学生への期待について、お伺いします。

将来、地域や社会、世界で貢献出来るような人になってほしい。その可能性は一人一人が十分持っています。「出る杭は打たれる」と言いますが、「出過ぎた杭は打たれない」、そのくらいになってもらいたい。また健康にはくれぐれも気をつけてほしい。健康だから元気が出て、やってやろうという覇気が生まれ、目標へ向かう勇気が湧く。この『健康、元気、覇気、勇気』を心掛けて頑張ってもらいたい。

⑥学校としての今後の課題をお聞かせ下さい。

一貫生、普通科生、理数科生、それぞれの優れた点をお互いに取り入れ、融合しながら、屋代高校の校是にある「質実剛健、文武両道」の伝統を更に発展、充実させていくこと。夢の夢ですが、将来ノーベル賞を受賞するような同窓生が現れることを期待している。

自分の課題として、生徒がよく話を聞いてくれるので、つい話が長くなってしまう。今後は「KISS」を心掛けたい。「Keep It Simple Sharp !」

クローズアップ

東大の箱根駅伝出場を夢見る
瀧澤　剛さん

信州新町中出身で高校第60回（普通科）の卒業。屋代高（陸上班）・東大（陸上運動部）を通して中・長距離選手として活躍。高校時代は3000m障害で9分22秒53で県優勝しインターハイ出場。東京大学理科一類に進み、工学部で化学生命工学を専攻。大学院工学研究科では「ヒト由来膜タンパク質の無細胞発現と膜局在化傾向の網羅的解析」により修士学位を取得。大学でのベストタイムは5000m、15分30秒98。今春、東京ガス㈱に入社。

○高校時代にはインターハイに出場されたそうですね。

―はい、3年生の時、3000m障害で9分22秒53の記録で県大会で優勝して、北信越大会でも3位に入り、インターハイに出場できました。とても大きな思い出として残っています。

○信州新町からの通学、陸上との両立は大変ではなかったでしょうか。

―陸上班の練習を6時30分に終え、篠ノ井駅まで自転車を走らせ、7時のバスに乗りました。8時に自宅に着くと9時までの60分間で、食事・入浴やその他全てを済ませます。そのあと2時間の学習を毎日心がけました。

○時間の使い方に大いに学ぶものがあります。東大の陸上運動部ではどのような生活を送られましたか。

―当時も今も、箱根駅伝大会に出場することを大きな目標の一つにしていますね。毎年夏に2～3週間北海道で行われる長距離合宿の参加など、大学の部活ならではの思い出が強く印象に残っております。また、大学の部活動は大規模なため、高校時代とは違い、数十人もの仲間と切磋琢磨しながら練習できたのもよい思い出です。怪我のため練習ができないことが多く、悔しい思いをしましたが、陸上部では大変貴重な経験をさせていただきました。

○文武両道をめざす、屋高生・附属中生にアドバイスをお願いします。

―部活と勉強を両立することは困難かもしれませんが、どちらも目標を持ちながら全力で取り組めばきっと成果がでるはずです。

最初は思うような結果が出ずに諦めたくなるかもしれませんが、粘り強く努力を継続してください。必ず大きな成果が得られるはずです。高校生である皆さんは、社会に出て働くことのイメージはまだできないかもしれません。

先生方や両親と相談しながら、悔いのない進路を歩んでほしいと願っています。

地球の裏側から「こんにちわ！」
フィオナ先生の懸賞パズル Fiona Sensei's English Puzzle

フィオナ (Fiona Ninnes) 先生

平成23～27年度の5年間屋代高・附属中に勤務され、昨年7月母国オーストラリアに帰国。大学で文化人類学とアジア研究を専攻、その後英語教師の学位（TESOL）と「平和学」の博士号取得。現在メルボルン市内の会社で「教育コンサルタント」(independent educational consultant) の仕事をされている。

応募規定

The three best answers in solving the following puzzle by Fiona Sensei will be rewarded with a 10,000 yen book card each. The dead line will be Aug.19. Both junior and senior high school students can apply. The alumni office receives your answer.(The office hour is from 1 to 4 p.m. except Tuesday)

Puzzle

Someone ripped the page for Monday 25th July out of Fiona's diary. She is very worried. She knows she has to meet Cathy, John, Peter, Emily and Rebecca that day, but she doesn't know where (Lakemba, Milperra, Strathfield, Bankstown or Manly), what time (8am, 10am, 12pm, 3pm, or 6pm) or how she will get to each meeting (Train, Bus, Ferry, Taxi or Walking). All she has is some scribbled notes on a piece of paper. Using the notes, help Fiona solve the problem.

Person to meet	Place to meet	Time to meet	Mode of transport
Cathy			
John			
Peter			
Emily			
Rebecca			

1. I don't take taxis early in the morning or in the evening.
2. I must meet Cathy some time after I meet Emily but some time before I meet John.
3. I can't take a train or bus to Milperra.
4. Peter can't meet me before lunchtime.
5. I have to be in Strathfield after lunch.
6. I mustn't be late for the evening ferry.
7. I have to meet someone at 10am in Bankstown.
8. I walk to any meetings held in Lakemba.
9. Cathy doesn't live in Lakemba, Bankstown or Manly.
10. I have to take a ferry to Manly.
11. I am having lunch with Peter.
12. I have the taxi ordered for 11:40am.
13. Emily lives within walking distance.
14. Rebecca will meet me at the train station.

一貫教育の系統的学習の成果
「知の甲子園」で若林君（高1）が総会で特別報告

去る5月28日の同窓会総会において、「知の甲子園」（公益社団法人「J・アチーブメント日本」主催）で全国優勝を遂げた若林由一郎君に、お父様若林一穂氏（高35回）とともにご出席いただき、特別報告をしていただいた。その要旨は次のとおり。

屋代高校附属中学校は今年で開校5年目となり、私はこの県下初の公立中高一貫校の2期生として入学しました。附属中学校なので、授業時間も高校生と同じで55分でした。また、6年間の一貫教育のメリットを生かし、学年の枠にとらわれずに学習を進めていくことが出来ます。例えば、中学1年生では一次方程式を習いますが、附属中学校では本来2年生で習う連立方程式と、高校1年生で習う不等式をまとめて教わりました。このように体系的に習うことにより、ただおぼえやすいということだけではなく、前の単元との繋がりを大切に勉強することが出来ました。

また、屋代高校附属中学校の校是は屋代高校と同じ文武両道です。この学校の一番の特徴は、やはり高校受験がないことだと思います。普通、中学生は夏ごろより班活動を引退し受験勉強に専念しますが、附属中学校では高校の班活動を体験することが出来ました。

また、附属中学校は生徒の視野を広げるため、それぞれが興味を持った分野で、各種検定やコンテストなどへの積極的な参加を勧めています。経済分野に興味を持つ生徒に対して行われている取り組みとして知の甲子園への参加があります。知の甲子園は、2人から4人のチームでMESEという架空のペンの会社の経営シュミレーションをする教育プログラムを使って行われます。利益や市場占拠率の高さを競い、最終的に企業の格付け指数が一番高くなったチームが勝ちとなるというものです。

この知の甲子園は今年で18回目の開催となり、全国から223チームの参加がありました。予選は5カ月かかってインターネット上で行われました。私たちのチームは途中危ないところもありましたが、1次予選、2次予選共に1位で通過しました。決勝戦は東京で顔を合わせて戦いましたが、やはりレベルが高く前半は8チーム中6位と、振るわない展開でした。しかし、最初に決めた作戦を貫こうとチームの相棒とよく話し合い数字を分析していくことが出来たので、結果優勝することが出来ました。

私は今回知の甲子園に参加して知の甲子園には『会社経営を通じて、広い視野に基づく情報分析力、意思決定力、他人とは違う意見をもつ勇気、自分と違う意見に対する寛容性、コストを意識する等社会生活に不可欠な基本的資質を育む。』という目的があります。私は今回知の甲子園に参加して将来の事をよく考えるきっかけになりました。大会を通じて、校内では先生にご指導頂きながら、目標になる先輩と、切磋琢磨して同じ目標に向かって共に努力できる仲間に恵まれて、今回の優勝は屋代高校のみんなでとったものだと思います。

このように、附属中学校では他では学べないようなことを学ぶ機会に恵まれ充実した3年間を過ごすことが出来ました。高校生になっても文武両道の校是をしっかり胸に刻み、積極的に取り組み、自分の目標に向かって学びを深めていきたいと思います。

◇編集後記◇

附属中学校の開設あたり創刊した「ユース版」が第5号を迎えました。お忙しい折、玉稿をお寄せくださいました関係皆様には、心より感謝を申し上げます。また取材については、「鳩が丘新聞」班員（以下の皆様）にもご協力をいただきました。

附属中・高校を問わず「鳩が丘新聞」の編集に興味ある方の入班をお待ちしています。（国語科・吉沢道夫先生までお知らせください）

○印班長、□編集長、△副班長

3年　□倉石佳奈、○松木太郎、松本樹、△村上絵理、新出海斗

2年　宮澤紀伊、山田彩菜、山崎朱理

1年　八木広美、坂口慎太郎、千野瑞季、戸井田一聖、原直希、廣間菜